〈国頭語〉のハダカ形主語おぼえがき
——現象文を中心に——

まつもと　ひろたけ

1　いままでの指摘から

『言語学大辞典』所収の「琉球列島の言語(沖縄北部方言)」で、格をとりあげた箇所をみると、「ゼロ格（はだか格）の用法の最初に「主語を表す。」があがっていて、アミー　プン.「雨が降る」（原文表記を引用者がカナ表記にあらためた。プは有気音）という例文ひとつがしめされている。

この記述はマークなしのハダカ格をマークされた他の格語形とともに名詞の格の体系のメンバーにくわえることからでてきたものである。奥田靖雄「語彙的なものと文法的なもの」にみえる、

> はだか格（あるいは名まえ格）を格変化の体系からはずすのは、日本語文法の欠点のひとつなのだが、それは格の接尾辞を後置詞とみなして、それに単語性をあてることからおこってくる。

という指摘は、方言文法にかぎらず、標準文章語、古代日本語などの、名詞の文法記述にあたって、念頭においておく必要があるだろう。

とりわけ琉球方言では、標準文章語では名詞のヲ格にあたるところが「ハダカ格」であらわれることから、奥田「語彙的なものと…」の指摘をかんがえにいれる必要性は切実なはずである。沖縄北部方言では、そのハダカ格のかたちが、さらに主語をもあらわすことが『言語学大辞典』に記載されるのだから、名詞の文法記述におけるこのかたちの重要さは余計増大したということになるだろう。ただ、主語をながめわたすと、その構文＝意味的な側面にかぎるとしても、動作のシテ、状態の主体、性質のもちぬしなど、内容面は相当多様である。例文アミー　プン. からそれをよみとるとしたら、自然現象をあらわす文（の主語）をさしているのかとかんがえたくなるが、辞典ということもあってか、その辺の事情にたちいった説明はなされていない。

この点の説明がその後具体的になった。『言語学大辞典』から１５年くらいたって刊行された、おなじく沖縄北部方言をとりあげた『名護市史本編・10　言語』には、自然

現象を表わす名詞が主語になる場合はゼロ格になります。

アイ，アミ　プッタチ．（あ、雨が降り出した。）
タカワタイシ　ミーニシ　プクン．（鷹の渡りで新北風が吹いている。）

のように紹介されている。

「自然現象を表わす名詞が…」の箇所でハダカ格主語文の構文－意味的な内容面がさししめされることになったため、おなじ自然現象文がでてきても、『言語学大辞典』の単なる例文紹介よりは数等うえといっていい。

もっとも、このレベルの記述になると、記述されていない現象や事実も気になってくる。「自然現象」という記述が限定的なものであって、ほかの現象、たとえば、生理現象、心理現象などの人間現象はあてはまらないことをいおうとしているのか。というようなことにおもいおよぶのは事情がある。沖縄本島北部方言の属する国頭語は、ほかに奄美諸島の与論島・沖えらぶ島方言をふくむ。さらに、その北部の奄美にひろがる奄美語とされる言語だが、国頭語と奄美語のむすびめのような特徴をもつ喜界島方言にも、また沖縄本島で国頭語より南部にひろがる沖縄語にも自然現象以外に人間現象にかかわる、ナダ　ウティユイ（なみだが　おちる—喜界島方言）とかミー　サミユン（目が　さめる—首里方言）のようないいまわしがみられることはそれぞれ、岩倉市郎『喜界島方言集』や『沖縄語辞典』にいまおもうとけっこうはやい時期に記載があり、また小論の筆者もそれを紹介したことがある。『名護市史…』でもこの種の現象文のことが自覚的にあつかわれていればもっとよかっただろう。

あらためてこの数年、国頭語の範囲に属する諸方言、奄美沖えらぶ島方言、与論島方言、そして沖縄本島北部方言に関して、上記の点を確認してみたが、沖縄本島北部方言に関しても、沖えらぶ、与論方言にくらべて、特にハダカ格主語をとる現象文のあらわれかたにおとろえがめだつとはみとめられなかった。もちろん、どの方言をとっても、下位方言のあいだでの空間差、それにはなしての年代による時間差がでてくるから、ハダカ形主語をもつ現象文の意味構造が、自然現象をさししめすものへと限定・特化された方言があってもおかしくない。そのようなばあいは、この方言に関しては人間現象にかかわる文ではハダカ格主語はみられないことがかきそえてあるとわかりやすいだろう。

以下の報告は地点ごとに繁簡があるなど不備の点がめだつが、今後の共同研究においてより完全なものにしていくための準備作業として、このようなかたちでまとめておく。

それでも、それぞれの地点で今後おそわるべき内容がうかびあがってくるような気がする。共同研究のメンバーのひとりして、これからも国頭語の内容類型学上の事実につながる現象を紹介していければとおもう。

なお、小論では 2009 年ユネスコの発表した危機言語リストのとりあげかたにしたがって「国頭語」の用語を採用することにした。国頭語はもちろん、日本国内の他の危機言語も、言語としての体系性をもちつたえたうえ、今後さらに活力をとりもどすようになることをねがうものである。

2　沖永良部島方言

沖永良部島方言でも、調査したいくつかの地点にハダカ形の主語がみられた。ただし、どの地点でもハダカ形主語はヌ形主語とならんでててくることがおおく、もっぱらハダカ形主語という文はすくないようである。

ティント　クムタンドー.　そらが　くもったよ。(知名町田皆)
ティントヌ　クムタンドー.

ハジ　フッキンドー.　かぜが　ふくよ。
ハジヌ　フッキンドー.

うえの例ではふたつともヌ形主語がまずでてきて、あとからハダカ形主語文もだしてもらうことができた。

久志検ではハダカ形の主語でこたえのでそれをあげておく。

アミ　フタンドー.　あめが　ふったよ。(知名町久志検)
アミ　フユンドー.　あめが　ふるよ。
アミ　フイ（イ）ドー.　　あめが　ふるよ。
ハジ　フキュンドー.　かぜが　ふくよ。
ナミ　タッチューサヤー.　なみが　たってるねえ。

ハナガサクのような植物にかかわるデキゴトも自然現象として、うえの天候などに連続しているようである。さらにトリガナクもおなじようにハダカ形主語が　ファートゥ

ヌ　ナチュンドー．のヌ形とともに、ファートゥ　ナチュンドー．のように「あることはある」という。デキゴトを動作的にでなく現象的にとらえているのだろう。

ハナ　サチャサ．ミーヨー．　はなが　さいた。みろよ。
ファートゥ　ナチュサヤー．　とりが　ないてるねえ。

うえの例、トリガナクは現象的にとらえてハダカ形主語が許容されるようだが、ネコ、イヌのようなペットになるとヌ形主語になる。さらに、なざしの主語などは、ヒト主語とおなじガ形主語もなりたつらしい。つぎの最後の例のタマガ…参照。

ミャーヌ　ナチュン／ナチュム．ねこが　ないてる。(久志検)
ポチヌ　ナチュム．ポチが　ないてる。
タマヌ　ナチュム．タマが　ないてる。
タマガ　ナチュム．タマが　ないてる。

うえの例からだと、ハダカ形主語が、サチャサ、ナチュサのようなサ形(準体形由来)の終止形となじみやすいようにみえるが、理由はまだわからない。
のりものも擬人化の反対としてだろうか、それにかかわるデキゴトが現象的にとらえられて、ハダカ形主語でもいい。

ヒンニ　イジユンドー．　ふねが　でるよ。
ヒコーキ　トゥビュンドー．飛行機が　とぶよ。

自然現象というより物理現象といったほうが適切なばあいも、やはり現象という面の共通性から、ハダカ形主語がでてくる。

チャー　ワチャンドー．お茶がわいたよ。
ユー　タギチャンドー．湯がふっとうしたよ。
メー　ワーリタンドー．フェーサ　カミギャ　フーヨー．めしが　たけたよ。はやくたべに　こい。
ミジ　ファッチューサヤー．みずが　ながれているねえ。

さらに、沖永良部方言では自然現象以外に、人間にかかわる現象にもハダカ形主語がひろがっている。おなじ国頭語に属する沖縄本島北部方言は、この辺をさきにのべたように、『名護市史…』では「自然現象」としているが、沖えらぶではこの限定ははずしてもよさそうである。

以下の例文のように一人称文のときは、一人称シテ主語が実際にはあらわないことがふつうだが、このような人間現象をあらわす文は、自然現象とちがって、ダレダレハ（ダレダレガ）でさししめされる、問題の現象の主体であるヒトの存在を想定しやすい。そうすると一種の二重主格文のようになるが、このこともハダカ形主語をなりたたせることと関連してきそうである。構文＝意味的な面からはこの種の二重主格文は、再帰文的といえるだろう。

ミー　サミティ…　目がさめて…（実際のはなしのなかで—田皆）
ワタ　ヤディ　ニチ　イジタン．はらが　いたくて　熱がでた。
ナーダ　イジタン．なみだが　でた。
ティー　マガタン．手が　まがった。

ニチ　イジティヨー　タイヘン　ヤタンドー．熱が　でてね。大変だったよ。（久志検）
ナー　フシ　マガティヨー．もう　こしが　まがってねえ。
ファー　ヌギティヨー．歯が　ぬけてね。
ワタ　ヤディヨー．はらが　いたい。

このような主語的なハダカ形（ハダカ形主語）は、島内でもシマ〈集落〉によって、またはなしての年齢によって、保存の状態はさまざまのようである。知名町上平川方言のはなしてが、

キンニュー　アミ　フティドゥ　ヤーチ　イカランタン．きのう　あめが　ふって　いえへ　いけなかった。（上平川）

をアミヌ　フティドゥとともにこたえてくれたのを、わきできいていた和泊町国頭方言のはなしてはハダカ形でないことはもちろん、ヌ形でもなくガ形でだしてきた。この地

点か、このはなしてかの、あるいは地点、はなして（の年代）両面からんでのムニー「ものいい」に innovation がすすんでいることがみてとれる。

3　与論島方言

与論島方言でも、ハダカ形主語は大体のところヌ格主語との併用になっているが、それはデキゴトをさししめすいろいろの現象文にみられる。自然現象をあらわす文からあげる。

・アッシェー，アミ　プユイ．あれ、あめが　ふる。（与論町茶花　以下同様）
・ハディ　プチ　キュイヤー．アマ　ハタジキリバドゥ　ナユイ．かぜが　ふいてくるねえ。あそこを　かたづけなくては　いけない。
・ナン　タッチュイヤー．なみが　たっているわねえ。
・ヨーギ　タッチュイヤー．うねりが　たっているねえ。

これらの文はメノマエの実景をおどろきをもってさししめす感じといえる。二番めの文はヌ格主語もでるが、ふつうはどちらといえばヌ格ではいわないという。最後の例もふつうはナンヌとはいわないようである。ヌ格主語だと強調する感じという、他島方言に関してもしばしばでてくる説明もきかれた。形容詞述語のばあいのハダカ形主語も同様で、ヌ格系はふつうつかわない。

・ナン　ターサイヤー．　なみが　たかいねえ。
・ナン　アラソー．　なみが　あらい。

つぎのような自然現象文だと、ハダカ形主語のあらわれかたが微妙のようである。

・ティダ（ヌ）　アガティ　キュイ．　太陽が　あがって　くる。
・チッキューヌ　アガトゥイ．　月が　あがっている。

ティダヌのばあいハダカ形のティダになることもあることはあるが、二番目のチッキューヌのヌはそれよりもおちにくいという。他島にもこういう語彙項目ごとの傾向があるとしたらあらためて確認しなくてはならない。

自然現象とまではいえないが、現象やモノの出現も、それをさししめすハダカ形の主語がでてくる文になりうる。

・ヌーゲラ　アマカラ　シンブシ　イジトゥイ．なにやら　あそこから　けむりがでている。
・ツムギ　ウイアガティ．つむぎが　おりあがった（できた）。
・マイ　ナティダー．ごはんが　できたねえ。

二番めのウイアガユイは自動詞だが、他動詞なら

・ツムギ　ウイアギタンムイ．つむぎを　おりあげたか。

のようになる。

この方言ではのりものなどをあらわす名詞は主語になるときヌ格形をとるようである。

・プニヌ　イジュイ．ふねが　でる。
・クルマヌ　チャートゥイ.くるまが　はしっている。

人間にかかわる現象をあらわす文も、自然現象文同様、ハダカ形主語があらわれる。生理現象文がおおかったが、心理現象ほかもなりたつ。

・ウイビ　マガティ　ナージ．ゆびが　まがって　ならぬ（もうだめだ）。
・パギ　ウンチ　キュイ．あしが　（ひとりでに）うごいて　くる。
・パー　ヌギティ　ムヌ　コーラジ．歯が　ぬけて　ものが　くえない。
・ナダ　イジティ　ナーランタン．なみだが　でて　ならなかった。
・ミー　サミティ．めが　さめた。
・ニチ　イジティ　ウキララジ．熱が　でて　おきられない。

・チラ　プクリティ．（おこって）　かおが　ふくれた。
・バチ　アタティ．ばちが　あたった。

・ジューゴヤヲゥドゥイヌ　パジマユイ．十五夜おどりが　はじまる。

4　沖縄本島北部方言

沖縄本島北部方言は、ここまでみてきた奄美の、沖えらぶ島方言、与論島方言をふくめて、ユネスコのよびかたで国頭語とくくられる、そのおおもとになる方言である。よびなとしては国頭方言とか山原（やんばる）方言とかでもいいが、いまは国頭語とかさなる国頭方言や、ヨソモノがやんばる方言といういいかたをすることはさけて、沖縄本島北部方言としておく。

この方言の自然現象をさししめす文のハダカ形主語は、まえにふれたように、すでに存在が指摘されている。

・アミ　プッタサー．あめが　ふったねえ。(名護市名護)
・カジ　プクッサー．かぜが　ふくねえ。
・カジ　チュンドー．かぜが　くるよ。
・ナミ　タッチョンドー．なみが　たっているよ。
・ハーカラ　ミジ　ワチュンドー．いどから　みずが　わくよ。
・スー　ミチ　チャ．しおが　みちて　きた。
・スー　ピチョンドー．しおが　ひいているよ。
・ナミ　タチューサヤー．カジ　チューク　ナインドー．なみが　たっているねえ。かぜが　つよく　なるよ。

物理現象も自然現象につながるものとしてハダカ形主語文がでてくる。さらに生産物にも関連していくようである。

・ミジ　ジャーナイ　イジトゥンドー．トゥミレー．みずが　ざあざあ　でてるよ。とめな。
・ユー　ワチョンドー．チャー　ハラサヤー．湯が　わいてるよ。茶を　いれようね。
・ウム　ニートゥンナー．いもが　にえてるか。
・ムヌ　ナトゥンドー．フェーク　ナー　カミ．ごはんが　できてるよ。はやく　もう　たべな。

ノリモノをあらわす名詞、さらにイキモノやヒト（のようなものもふくむ）をさししめす名詞も、現象文、あるいは存在文的なくみたての主語にくわわるときはハダカ形になっていい。二番めの文だとマジムンヌ　タッチョーン．ならやはり強調がはいるという。

・チューヤ　プニ　イジランタンドー．きょうは　ふねが　でなかったよ。
・マジムン　タッチョーン．おばけが　たっている。
・ソーミナー　ヲゥインドー．めじろが　いるよ。

沖縄本島北部方言でも、地点によってはヨリふつうに現象文のハダカ形主語があらわれてくる。以下の文のような終止的な述語では、ヌ格主語ではなくて、むしろハダカ形主語がふつうというこたえがかえってきた。自然現象文からあげる。

・アミ　フユン．あめが　ふる（東村　平良）
・カジ　フクン．かぜが　ふく。
・クーヤ　ナミ　アリトゥインドー．きょうは　なみが　あれて　いるよ。
・スー　ミチティ　チューンドー．しおが　みちて　くるよ。
・ナマ　スー　ヒッチョーンドー．いま　しおが　ひいているよ。
・ミジ　ワクンドー．みずが　わくよ。

物理現象も同様である。

・ミジ　ナガリトーンドー．（水道から）みずが　ながれでているよ。
・ミジ　ハトーンドー．（水道から）みずが　（いきおいよく）でているよ。
・ユー　ワチョーンロー.フェーサ　トゥミリ．湯が　わいているよ。　はやく　とめな。
・ユーフル　ワチョーンドー．ふろが　わいているよ。

生産物の例もあげておく。

・サーター　リキトゥンドー．砂糖が　できあがったよ。
・ムン　ナトーミ．食事が　できているか。

のりものの名詞のばあいもヌ形でなくていい。

・フニ　イジランタン．ふねが　でなかった（よ）。

うえのような現象文でも、述語がつきそい文のなかにあって、文を終止しないばあいは、主語はハダカ形でなく、ヌ格の主語になると、それぞれ例をしめしてくれた。他地点でも今後の確認が必要である。

・ミジヌ　ワクン　バス　みずの　わく　ばしょ
・ナミヌ　アリティ　フニヤ　イジャサランドー．なみが　あれて　ふねは　だせないよ。
・フニヌ　イジランタシガ　ナー　チューヤ　イカランテー．ふねが　でなかったので　もう　きょうは　いけないだろうね。

人間現象文のばあいのハダカ形主語も、もちろんなりたつ。このときは主文、つきそい文でのハダカ形、ヌ格形主語のつかいわけはあまりきかれない。つきそい文かあわせ述語の主要部かの区別も、特にされていないようである。

・ハー　ヤムン．歯が　いたい。
　ハー　ヤリ　フシガラン．歯が　いたくて　がまんできない。
・ミー　サミティ．目が　さめた。
　ミー　サミティ　ニンララン．目が　さめて　ねむれない。
・イービー　マガティ　ウンカン．ゆびが　まがって　うごかない。
・ヒサ　ウンナ　ビッチェー　ヲゥララン．あしが　うごいて　すわって　いられない。（あしが　かってにうごいて　じっとしてはいられない）
・エイサー　ハジマインドー．エイサーが　はじまるよ。
　エイサー　ハジマトーシガ　ミーガ　イカンナー．エイサーが　はじまってるけど　みにいかないか。

さいごの例でつきそい文のほうの主語でもエイサーヌとはふつういわないという。

5　ハダカ形〜ハダカ格

表題においてハダカ形主語という用語をつかっているが、これはハダカ形でなくハダカ格、あるいはゼロ格といってもさしつかえなかった。もっとも、小論の筆者はハダカ形とハダカ格のつかいわけに関して、以前松本「名詞の〈主体＝客体格〉の用法と問題点」でつぎのような表をさしだしたことがある。

Nφ ___	非語形（じつはN－）		
	語形	非格語形	
		格語形	同音形式
			多義形式

このひだりのNφがハダカ形で、格語形にあたるNφ（と表記にすればそれ）がハダカ格ということになるが、いまもこのような表示をふまえて、ハダカ形とかハダカ格といっていることにかわりはない。

うえの表の内容に関して考察をふかめてココログルシイのココロは非語形、ならべたてのハダカ形は非格語形さらに琉球語で主格のヌと属格のヌは同音形式（あるいは多義形式）などと区分していくことは別稿で論じなくてはならない。そのさい、伝統的に名詞の格語形のなかにくりいれられている、ロシア語などの名詞述語にみられる造格述語、名格（nominative case　は「主格」といわないでおく）述語などの述語になる名詞の語形のあつかいの妥当性なども問題になるとしたら、よけい小論でとりあげることはできないと思料される。

さらに、ハダカ格という外形＝表現面からのなづけでなく、おなじ格語形としてであっても、内容面からの accusative, dative　というようななづけをめざすとしたら、うえでとりあげた国頭語をめぐっては、内容類型学的な観点のことがからんできて、対格（や主格）タイプの用語である主格とか対格を軽率にもちこむことはためらわれる。絶対格の用語のほうがまだ内容にあっているのかもしれないが、その辺の事情の考察はすべて

タナあげにしたついでに、「格」のなまえまでとりはらって、ハダカ形のよびなへと後退させることにした次第である。

おもな参考文献：

岩倉市郎 1941『喜界島方言集』中央公論社（1977 年国書刊行会再刊）
国立国語研究所 1963『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

奥田靖雄 1972「語彙的なものと文法的なもの」（奥田著 1985『ことばの研究・序説』むぎ書房等に所収）
島袋幸子 1992「沖縄北部方言」（亀井孝ほか編著 1997『琉球列島の言語』三省堂等に所収）
名護市役所編 2006『名護市史本編・10 言語―やんばるの方言―』
松本泰丈 1993「名詞の〈主体＝客体格〉の用法と問題点」（仁田義雄編）（1993『日本語の格をめぐって』くろしお出版）
松本泰丈 2006『連語論と統語論』至文堂

小論に紹介した各島方言の事実をおそわるにあっては以下のかたがた（敬称略）にお世話になった。ありがとうございました。
沖えらぶ島方言―新納康雄、新納茂子（知名町田皆）、大山澄夫（知名町久志検）、松村雪枝（知名町上平川）、西村富明（和泊町国頭）
与論島方言―喜山康三（与論町茶花）
沖縄本島北部方言―宮城一夫、玉城一男（名護市名護）、宮城義幸（東村平良）